



一番右端の集落が現在の九度山町。さらに右に上ると高野山へ至る。中心を流れるのが紀ノ川で左の山々は和泉山脈。1614年(慶長19年)10月9日、幸村は大助と共に、九度山を後にし大坂城へと向かった。

日本一の兵、 九度山に起つ

ひのもといち
つわもの

真田十勇士や抜け穴など、
ミステリアスな真田一族

真田昌幸や幸村は絶対不利といわれる戦いで、何度も勝利を収めています。その戦術はまるで妖術や忍術のようで奇想天外な策も多かったといわれています。元々真田家は修験道や山伏を支配していた一族であり、情報収集やそのような技に長けていたのでしょう。また高野山や熊野三山周辺も修験道に関わりの深い地域ですから、幸村たちが高野山へ蟄居させられたのも浅からぬ縁があったからかもしれません。そういった背景もあり、抜け穴伝説や忍者猿飛佐助など真田十勇士物語が生まれてきたのだと思われまます。

その後、関ヶ原の戦いに破れた昌幸・幸村父子は高野山蓮華定院に蟄

戦士となり、戦力に勝る徳川軍に何度も煮え湯を飲ませたのです。

幸村は九度山においても、碁を差したり真田紐の作り方を教えるなど、父と同様に周囲の人々と良好な関係を保っていました。その結果、幸村たちが大坂へ出陣する際には、九度山の村人たちは役人に通報することなく、調べにも嘘をついてまで庇い、さらには幸村たちと同行し共に戦った人も多かったといわれています。父子ともに気配りがよくできた人物で、民衆に好かれる性格だった

居させられ、14年という長い年月を九度山で過ごすこととなります。その中で「金がないので急いで送ってくれ、酒もないので送ってくれなど、上田に住む長男の信之や知り合いに援助の手紙を何通も送っています。弱音ばかりの手紙は、それを検閲をする徳川を油断させ、監視の目を緩めようとした父子の術策であったのかもしれません。

戦いの心構えと共に生きた昌幸と幸村、そして九度山。

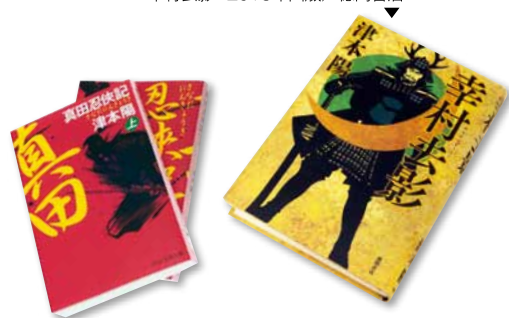
真田軍の強さの秘密は統率力に優れていたことと、優秀な戦士がいたからだといわれています。上田にいた昌幸は日頃から領民を大切にしていました。そしていざとなれば彼らは司令官の指示に従い、勇敢な

のでしようが、幸村もいつか訪れると信じていた戦いに備えた関係を九度山で築いていたのかもしれない。そうでなければ、一般人が天下を配する徳川の勢力に楯つき、幸村を扶けようとする気概など持てなかつたと思いますね。

近くには全国から信仰を集める善光寺があり、周囲を山々に囲まれた上田。その上田と九度山の生活には多くの共通点があるように思います。幸村は父昌幸の「戦いに挑む心」を踏襲していたのでしょね。

津本陽、 幸村を語る

幸村去影：2013年出版／徳間書店



真田忍俠記(上・下)：2015年出版／PHP研究所



津本陽(つもとよう)

1929(昭和4)年、和歌山市生まれ。1978年、故郷和歌山を舞台にした「深重の海」で直木賞を受賞。剣道三段、抜刀道五段の腕前で武道への造詣が深い。真田にまつわる小説として、猿飛佐助や霧隠才蔵の活躍を描いた「真田忍俠記」や、大坂の陣に挑む真田幸村の心情を描いた「幸村去影」がある。